HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歴史意識と人格形成にかんするクララ・ツェトキン
Author(s)	ゲルト, ホーエンドルフ
Citation	北海道大學教育學部紀要, 31, 81-85
Issue Date	1978-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29173
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P81-85.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

歴史意識と人格形成にかんするクララ・ツェトキン

ゲルト・ホーエンドルフ

Clara Zetkin über Geschichtsbewusstsein und Persönlichkeitsbildung

Gerd Hohendorf

上杉重二郎教授の退官に際して，彼に敬意を表して本論文を献げる。

ドイツおよび国際的労働運動の一婦人代表について，次のように述べらるべきである。すなわちその人の名は，職業生活と社会生活における婦人の同権のための，婦人たちの広範な闘争と，永久に結びつけられているであろうと。国際赤色救援会の多年にわたる総裁として，彼女はプロレタリアの連帯にとって，一つのシムボルとなっていた。しかし彼女の教育学上の業績や教育政策上の業績はあまり知られていない。そこでこれらをここでは歴史が人格を形成する作用という観点から，紹介したい。

今から120年前，1857年7月5日にクララ・ツェトキンは，ザクセン邦のヴィーデラウにおいて村の一教師の娘として生れた。彼女の父親は「トルストイ流のキリスト者」であって，民衆とともにありと感じており，そのすべての力を国民を精神的また道徳的にたかめるために用いたのであった。そして，このような精神で彼は，娘を教育した。クララは学校の屋根裏部屋で，埃にまみれた本の山のなかからフランス革命史とスイスにおける解放闘争の記述とを見出した。厳格な新教徒であった父親の書庫のなかでは，彼女は法王に対する蜂起の歴史を発見した。激情的な読者が熱心に読んだこの三冊の本は，早くも彼女の少女時代にその社会的な理想像を刻印した。

フランス革命史の本は，恐らくは彼女の母方の祖父から受け継がれたものであった。この祖父ジャン＝ドミニック・ヴィタルは，ナポレオンの士官学校で教育を受けたのだが，ナポレオンが占領者となって，革命の理想を裏切った時に，彼から離れた。情熱的な母親によって，クララは全くブルジョアジーの解放闘争の精神のなかで，教育された。自由，平等および友情という観念は，彼女の行動の原理となった。法王制に対するさまざまの戦いの記述から，彼女はウィクリフ，フスおよびその時代のほかの国民的英雄について学んだが，彼らは失敗が重なってもなおその信念を守って進んだ人々であった。「彼らから私はすでに子どものころ，ひとはその確信するところのためには，死ぬ用意がなければならぬことを，学んだ。」[1] こう彼女はその生涯を終るに当って語ったが，その時までに彼女自身も数え切れぬほど何度となく，労働者階級に対するその誠実と社会主義の事業に対するその忠誠とを実証してきたのであった。

彼女が村の子どもたちといっしょに演じた芝居のために，クララはその脚本を作成した。諸国民の解放闘争が，彼女の好んだテーマであった。このようにすでに極めて早い頃から，歴史上の関連に対する彼女のきわ立った関心と理解とが発達していた。歴史的な次元で思考することが，彼女の性格を規定する指標となった。そしてそのことの必然的な結果として，彼女の

道は労働者階級へ，また新しい社会体制のための闘争へと導かれることとなった。

* * *

マルクス主義教育学は，人類がその数千年の歴史のなかで集積してきた，進歩的な教育上の認識と経験との総体に基いている。クララ・ツェトキンはこの思想を，1904年に行なった「学校問題について」という，彼女の綱領的な演説のなかで，次の言葉で表現している。「我我は学校の使命を，偉大なる教育者ヨハン・アモス・コメニウスが学校に対して次のように要求した，そのような意味で理解する。すなわちコメニウスは『人間として生れたすべての者の普遍的教育は，すべてを人間なものにまで高めることである。』」[2] あらゆる進歩的な教育学的な諸要求を，上昇期のブルジョアジーは実現することが出来なかったし，そしてブルジョアジーの発展の後の局面に至っては，もはやそれらを実現しようとも思わなかった。労働者階級はこれら進歩的な諸要求の擁護者ともなり，また同時にその遂行者ともなった。

この演説のなかでクララ・ツェトキンは，当時の学校における歴史教育を批判して，この授業は「殺戮的愛国主義の束縛から救済され」ねばならぬ，と述べた。彼女は「すべての学科の授業の根本的な改革を，なかんずく歴史の授業の改革」を要求したが，……彼女によれば，「これらの学科は授業計画のなかで，然るべき意義を持たぬばならず，それらは最良の方法によって教えられねばならず，そして科学研究と合致しつつ精神的発達を促進すべき，諸知識を伝達しなければならない。」[3]

しかしながら当時の学校が実行できなかったこと，また実行しようとしなかったことは，これを労働者階級自身が組織しなければならなかった。1900年9月に開かれた第2インタナショナルのパリ会議は，ロザ・ルクセムブルクが「諸国民の平和，軍国主義および常備軍の廃止」についての報告にもとづいて，「軍国主義と戦うという目的のために，いたる所において青年を教育し，かつ組織することに取り掛かる」[4] という決議——すべての社会主義政党を義務づけるところの決議——を採択した。世紀の変り目に，一連のヨーロッパ諸国において社会主義的な青年組織が生れた。ドイツにおいてはカール・リープクネヒトが，社会主義青年組織の発展に対して極めて大きな寄与をなした。彼の論文「軍国主義と反軍国主義，国際的青年運動を特に考慮に入れて」（1907年）が発表された後に，プロイセン的なドイツ司法機関が，彼に禁錮を言い渡し，そしてそれに続いて〔社会民主〕党指導部および労働組合指導部のひより見主義者が，社会主義青年組織から自立性を奪って，これを小市民的な教育団体に変えようとした時，クララ・ツェトキンは1908年の社会民主主義婦人会議を，社会主義的青年組織の促進のために，すべて役立たせたのであった。

その報告のなかで彼女は，社会主義青年組織は同時に教育組織であり，闘争組織でなければならぬ，という所から出発して，「闘争自身が，最も強力であり，かつ最も価値に富んだ教育的な諸力の一つである」ことを，強調し，また「闘争の熱い雰囲気のなかで，洞察力，才能および特色ある性格が，急速に成熟する」[5] と力説した。しかし青年の政治的な解放闘争への参加は，普通教育を媒介とし，これと手を携えて行うべきである。それ故に社会主義的青年組織は，「プロレタリア青年に対して，若い労働者の調和のとれた，全人的な発展を促進するのにふさわしい，身体的，精神的および道徳的な面での基礎教育の諸要素が身近かなものになるように，配慮しなければならない。」[6]

これとの関連においてクララ・ツェトキンはまた，社会主義的な人格形成に際して果さるべき歴史の任務について，次のような見解を示した。社会科学においては，「歴史上の事実や

社会的な事実を過剰に蓄積することに，重点をおくのは許されない。伝達された知識は，むしろとりわけ社会の独自の法則的発展についての，明瞭な認識とならねばならない。この知識は，社会の歴史的な生成と経過との原動力やこの発展を支配している法則を証明しなければならぬ。」[7] 社会の発展の法則性を発見することが，歴史教育の目標である，とクララ・ツェトキンは極めて印象強く強調したが，この発見は，「資本主義生産の機構やこの資本主義生産に依拠しているブルジョア社会体制およびここで機能している促進的な諸要因の中に，明瞭な洞察を加えるものでなければならない。」[8]

歴史研究に従うことは，クララ・ツェトキンにとっては，自らを過去のなかへ沈めることでも，「学問的なノスタルヂャ」でもなく，自分のすべての力が活溌に働くのに役立てるべきものであった。社会主義的な人格形成の過程において，彼女が課題としたものは，次のような確信を，若い人々の間に確固として植えつけることであった。「社会の発展は自然の必然性をもって，不可避的に，かつ阻止し難く，社会主義社会へと導かれる。彼らは，資本主義体制を革命によって変革し，社会主義体制を準備する力を知る。そしてそうすることで彼らは現代の歴史的発展の中で，プロレタリアートの目的意識的な意志が演ずる巨大な役割についての意識に目覚める。」[9]

革命的歴史意識の発展のために，クララ・ツェトキンは，ドイツ労働運動および国際労働運動における，50年以上の年月にわたる活動によって，限りなく多くのことをなし遂げた。彼女はドイツの労働者党の諸々の党大会や国際会議における演説によって，また社会民主党の婦人雑誌『平等（グライヒハイト）』(1892–1917) の編集者として，このような業績を挙げた。つねに彼女は，全くレーニンの精神に従って，「基礎的歴史的関連」を叙述した。すなわち彼女は「すべての問題を次のような視点から……」観察した。「歴史上の一定の現象はいかにして生じたか，この現象はその発展のいかなる主要段階を経過しつつあったか，……そして，当該の事実から現在何が生じているか。」[10]

レーニン主義に従って問題にアプローチするというクララ・ツェトキンの方法は，数多くの例を通して証明され得るだろうが，ここではただ彼女の長大な演説を例として示すことにしよう。それは1924年夏，モスクワで行われたコミンテルン第5回大会において彼女の行なった，「インテリゲンチャ問題について」という報告である。彼女が過去と現在における知識層の社会的地位およびなかんずく労働者階級に対するその関係を解明したこの報告の著しく目立つ指標と言えば，思想の深さ，構築の明確さ，および表現の輝かしさであった。まず彼女は，ブルジョア的＝資本主義的体制の建設に当っての，インテリゲンチャの進歩的な役割を，つぎのように評価した。「インテリゲンチャは，この抑圧し搾取する権力を打倒するための，精神的な武器を鍛えかつ用いた。……インテリゲンチャの闘争は，科学，芸術および文化を，封建社会の絆から解放した。」[11]

彼女はそれから，権力を得たブルジョアジーがインテリゲンチャを，確かに自分の富を増すために利用はしたけれども，同時にいかに彼らを飢えさせ，窮乏に陥れたかを，詳述した。インテリゲンチャは，その社会的な地位の故に，生産手段の所有には自らは全く関与していなかったか，あるいはそのほんの僅かな部分にしか関わりがなかったので，労働者階級と結合しなければならなかったが，しかしただ少数の者のみがこれまでに，革命的労働運動に至る道を見出したのであった。インテリゲンチャの多数は，啓蒙というこの言葉の本来の意味で大衆のもとで啓蒙的に働く代りに，ブルジョアジーにかねを支払わせて，その精神的な力，その知識

と才能を，勤労大衆を思想的に圧迫するのに役立てた。

クララ・ツェトキンはこの報告のなかで，肉体労働と頭脳労働との異なった評価という重要な問題にも，立入った。彼女の表現によると，精神労働をより高く評価し，手の労働をより低く評価するのは，歴史上理由のある現象であり，また政治的な現象である。ブルジョアジーは，インテリゲンチャを労働者階級の上におくために，またそのことによってこの向上しつつある階級に対する戦いにおいてインテリゲンチャをいっそうよく利用し得るためにも，精神労働をより高く評価した。その上ブルジョアジーはインテリゲンチャを絶えず過剰にしておくことによって，精神と文化の創造者たちの間に経済的な不安定さを生じさせた。そしてこの不安定性のために彼らは，自己の経済的，政治的な非独立性をはっきりと見るに至った。この「精神の過剰生産」を生み出すために，高等学校や大学は実際に必要とされた数よりも，はるかに大きな数の精神的職業の候補者を，常時卒業させた。この過剰を——これは実にまた今日においても，資本主義国家にとっては特徴的なことになっている——ブルジョアジーは，なにか国民教育の向上のために向けるようなことはしなかった。その反対である。「青年の極めて大きな精神的な財宝は，向上を見ることなくそのままになっている。数え切れぬほどの文化的な富は，破壊される。」[12] 精神の創造者は——そのようにクララ・ツェトキンは強調した——その展望を社会主義のなかに認めねばならぬ。そのことを彼らに説明するのが，共産主義諸政党の任務である。「我々は，ただ共産主義のみが，インテリゲンチャおよび精神的文化の利益を代表している事実を，インテリゲンチャが意識するようにしなければならない。」[13]

クララ・ツエトキンにとっては，共産主義とは人間のあらゆる本質的な諸特徴が全面的に発展することと同じ意味であった。彼女は繰り返し繰り返し，「もっとも広汎な大衆の間に，精神生活と道徳生活のあらゆる噴泉を求め拓く」よう励ました。「ある人間の精神的，道徳的価値が高ければ高いほど，またその人の知識の程度とその力と才能の発展が，よりいっそう高ければなおそれだけ，その人の革命的な力，革命的な認識および革命的な行動意志などの度合は，よりいっそう大きくなるだろう」[14] と彼女はある演説で強調した。この演説は，彼女が始めてソヴェト・ロシアを，この社会主義が現実のものとなったレーニンの国を訪問した後に開かれた，1920年12月におけるドイツ独立社会民主党の左翼とドイツ共産党の合同党大会の席上行われたものである。

今日では社会主義諸国においては，労働者階級とインテリゲンチャとの同盟が，すなわち権力と精神との同盟が，固く組まれて，経済的文化的建設の根本的な一条件となった。世界のその他の部分においても，ますます多数の精神と文化の創造者たちは，クララ・ツェトキンが50年前にそう要求したように，歴史的な関連を認識するに至ったし，また自己の社会的な責任を認識するようになった。そして彼らは絶えず成長しつつある反帝国主義的人民運動のなかに，自分の場所を見出したのであった。（上杉重二郎訳，übersetzt von Juiiro Uesugi）

原著者註

1) L. Dornemann: Clara Zetkin. Ein Lebensbild. Dietz Verlag, Berlin 1957, S. 16.
2) C. Zetkin: Ausgewählte Reden und Schriften. Bd. I. Dietz Verlag, Berlin 1957, S. 254.
3) Ebenda, S, 264.
4) Internationaler Sozialistenkongreß zu Paris 1900. Berlin 1900, S. 27.
5) C. Zetkin: A. a. O., S. 431.
6) Ebenda, S. 417.

7) Ebenda, S. 420.
8) Ebenda, S. 420 f.
9) Ebenda, S. 421.
10) W.I. Lenin: Über den Staat. In: Werke, Bd. 29, Dietz Verlag, Berlin 1961, S. 463.
11) C. Zetkin: Ausgewählte Reden und Schriften. Bd. III. Dietz Verlag, Berlin 1960, S. 14.
12) Ebenda, S. 36.
13) Ebenda, S. 44.
14) Bericht über die Verhandlungen des Vereinigungsparteitages der USPD (Linke) und der KPD (Spartakusbund). Berlin 1921, S. 125.